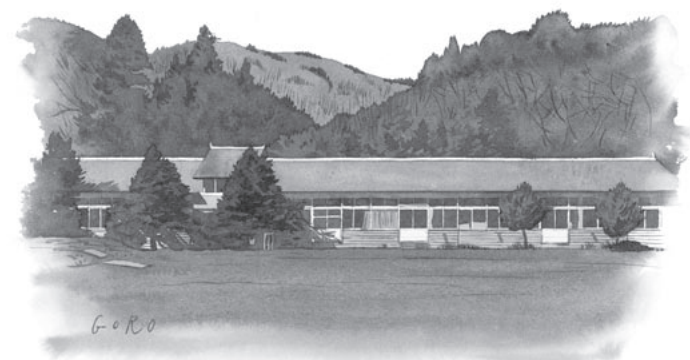


曳家職人——岡本直也〔後編〕

その技術の特異さから、一般の人はもちろん、建設業者でも詳細を知らない「曳家」の世界。初期投資額が大きく新規参入が困難なため、後進の育成面でも問題を抱えている。高知出身の曳家職人の岡本に、若手の育成、他職とのやりとりについて話してもらった。



岡本を手伝う弟子の一人、飯田。体が資本の厳しい仕事だが、「全然苦になりません。これはもう、社長の人柄ですね」



石巻市雄勝町の旧桑浜小学校

「曳家の技」次代の担い手

東日本大震災の影響で、千葉県浦安市で発生した液状化。岡本直也は、仕事の拠点を高知から千葉に移し、民家の沈下修正工事をひっきりなしにこなしてきた。その工事が一段落した今も、関東地方を中心に仕事を請け負っている。

「いろんな意見を統合すると、今の日本で曳家職人といえる業者がだいたい一二〇社くらい。でもほとんどの親方が七〇歳過ぎて後継者もない状態だから、ある程度若くて経験もあつて全国回ってるのは、実質二〇社くらいじゃないかって言われてます。今はたまたま注目を浴び

てますけど、実は絶滅寸前の技術なんです」
現在、岡本の会社には二人の若い職人がおり、現場で親方を手伝っている。その一人、飯田英幸は全くの未経験からこの職に就いた。

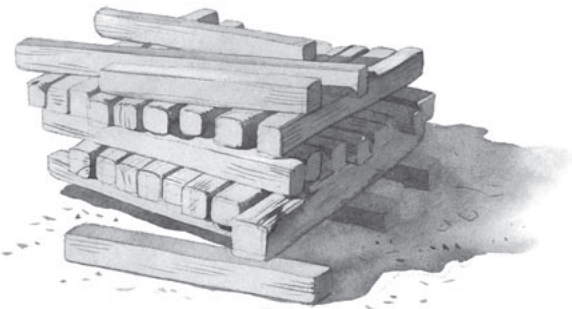
「ほんとに偶然の積み重ねで。たまたま社長の知り合いに共通の知人がいて、その時たまたま人手不足で、僕が求職中で。最初、『もやしっ子でもできる仕事だから』って言われて行ったんですけど、結果は…見事にダメされましたね（笑）。高知市にある若宮八幡宮っていう神社の沈下修正が終わって解体するタイミングだったんですけど、七五〇の鉄骨を手で運んだり、三五トの重いジャッキをかけたり…こんなのもやしっ子にできるわけないだろう、と（笑）」
特に曳家職人をめざしていたわけでもなかったが、かれこれ三年ほど続けている。師匠の岡本も頼もしそうな目で見守る。

「まあ、普通の人じゃ続かないですよ。彼みたいに、他人様の家の下に潜ってトイレのパイプ切るのが苦にならないような人じゃないと」
二十一世紀中の発生が予測されている大規模地震の一つ、「南海大地震」。その影響を特に大きく受けると言われているのが高知市だ。

「市の中心部が液状化して、地盤が二層沈下して、そこに二層の津波が来るから、トータルで四層の浸水が一週間くらい続くって言われて



おかもと・なおや●1960（昭和35）年、高知県高知市生まれ。大工だった父は地元の曳家職人の下で働いて跡取りとなる。その父に19歳から師事。27歳で家業を継いで曳家の親方となる。東日本大震災以降、拠点を千葉に移して住宅の沈下修正工事を数多く請け負い、高知の曳家技術の名を広めた。メディア展開により、工法の理解促進も図っている。



建物を支える枕木

「津波被害が予測される 高知に後継者を育てる。 それが自分の役目」

益社団法人による復興支援プロジェクトであり、予算を抑えるために、職人同士で作業内容を直接打ち合わせなければならない。「とにかく全ての業者さんにとって、我々と一緒に仕事することがルーティンから外れてますから：仕事内容を伝えてなるべく自分たちの領域に引っ張ってきつつ、後から入る業者さんに、最大限枕木の設置場所を譲歩して、これ以上ずらしたら組

んだ木が崩れちゃうんだっていうことを仕事ぶりで納得させないといけない」
同業の建設業者でも一から説明しないと理解できない、曳家工事の特殊性。しかし液状化や浸水の被害から、人々の大切な財産である住宅などを復旧することができる技術を絶やすわけにはいかない。その熱意が、岡本をキツい肉体労働へと駆り立てる。



左／ジャッキにも目的に応じているいろんな種類がある。ジャーナルジャッキの15t用は重量20kg以上。
右／旧桑浜小学校の現場にて。教室の壁を取り払い、新たに柱を立てた。当初予定していなかった追加工事が発生しがちなのも曳家工事の難しさの一つ。

るんです。私の家なんか資産価値ゼロですよ（笑）。でも、だからこそ高知に後継者を作らなきゃいけないと思ってるんです」

「『この町には今病人がいらないから医者はいなくていい』とか、『火事が起きてないから消防署はいらない』とか、そんな話って通らないでしょう。将来高い確率で起きる地震災害のために曳家の職人を養成しておかなきゃいけないはずなのに、自治体がなかなか動いてくれない。地元に戻った時には議員さんとか首長クラスの方に話してまずけどね。二人の若手がウチを継いで続けていきたいって思った時に、生活の不安がないような態勢がなくなっちゃらないので」
浦安での一件以降、テレビや講演への出演依頼が相次ぎ、「曳家・岡本」の名も知られるところとなったが、競争の厳しさは変わらないという。

「事故が起きた時のために最低限の保険はかけてまずけど、彼らにも失業保険とか社会保険とか一般企業なら当たり前の保障が受けられるようにしていきたい。私たちの仕事は体が資本だから、作業員のケアをすることは仕事を続けていくために非常に大事なんです」

大工から曳家の道に入った父

「親父は大工の弟子上がりで、家も一軒建て

てるんです。でも家大工なんて他にいくらでもいるし、親父なりに『曳家の方が競合相手が少ない』って考えてこの世界に入ったようです」

岡本の父が一七歳のころ、高知市内にあった石造りの四国銀行上町支店を電車通り沿いから背面へ移動させるといって、後々まで語り継がれるほどの大がかりな曳家工事が行われ、父はその仕事に若い衆の一人として参加した。その時の経験も後押しとなったのかもしれない。

「当時の高知の曳家業界は何代目とかの門派が厳しくて、独立したばかりの親父は仕事が取れなくて大変だったみたいです。結局後継ぎのいない地元で有名な親方を手伝って、その方の引退後にのれんを引き継いだんですね」

高校卒業後、父の下で働いていた岡本だったが、一〇年もしないうちにその父が病に倒れ、二七歳の若さで看板を背負うことになる。

「早くに親父が倒れて、若くして親方になっちゃったから、仕事も選べなくてあちこちの現場でさんざん嫌な体験をしました。職人の労働環境にこだわるのはそのせいもありますね」

他業種とのやりとりが大事

工程・作業内容が伝わりにくく、他業種との情報共有が重要となる曳家工事。特に今手がけている石巻市雄勝町・旧桑浜小学校の現場は公